

笠岡神輿音頭

西本町天神会

## 笠岡音頭

あなたナ 抜いてよ 痛くてならぬヨ  
早くナ 抜いてよ 薔薇のトゲ

いたら見て来い 名古屋の城を 金の鯨 あまざらし

いやなナ 男の 親切よりもヨ 好いたナ 男の 無理がよい

いろはいろはと 習ったけれど はの字忘れて 色ばかり

うちの兄ちゃん 夜釣りが好きで 夜の夜中に 竿のばす

うちの姉ちゃん 馬より強い 村の若衆 皆乗せる

うちの父ちゃん 狐か狸か 夜の夜中に 穴探し

うちの母ちゃん 洗濯好きで 夜の夜中に 竿探し

お伊勢戻りに この子が出来て 名前付けましょ 伊勢松と

お医者ナ 様でも 草津の湯でも 惚れたナ 病いはなおらせぬ

お前ナ 一人と 定めて置いてヨ 浮気ナ その日の 出来心

お前ナ 百まで わしや九十九まで 共にナ 白髪ノ 生えるまで

お前見染めた 去年の五月 五月菖蒲の 湯の中で

かわいい鳥だよ つぐみの鳥は 柿をつついて 紅つけた

コケコなあ鶏 死ぬまで鳴くがよ 死んでなあ 残るは ほらの貝

ここのナ 座敷は 目出度の座敷ヨ 鶴とナ 亀とが 舞を舞う

ここの屋敷は めでたの屋敷 鶴と亀とが 舞を舞う

ここはなあ 備中 笠岡町じゃよ 人情なあ 厚くて 良いところ

しかけた所に お客が来て しぶしぶやめるは へぼ将棋

そろたなあそろたなあ西本町の若い衆

こりや祭なあ祭よこれさえ よくそろた、

そろたなあ そろたよ 西本町の 若い衆

こりや 稲のなあ出穂より、これさえ よくそろた、

どうせナ やるなら でかい事やろうぜ

奈良のナ 大仏 屁で飛ばせ

とろりとろりと 回るは淀の 淀の川瀬の 水車

なるとならぬは 目元で知れる 今朝の目元は なる目元

みいたかなきいたか名古屋の城はよ、金のな鯨これさえ 雨ざらし

めでためだが 二つ重なれば 庭に鶴亀 五夜の松

めでためだが 重なる時は 鶴が御門に 巢をかける

めでためだの 若松様よ 枝も栄えて 葉も茂る

もしや来るかと 窓押し開けて 見れば立山 雪ばかり

わた者な備前の 岡山育ち 米の成る木を まだ知らぬ

阿波の殿様 蜂須賀公が 今に残せし 阿波踊り

阿波へ阿波へと 流れる潮は やがて鳴門の 渦となる

安芸の宮島 廻れば七里よ 浦は七浦 七恵比寿

安木な 名物 荷物にやらぬよ 聞いてな お帰り 安木節

伊勢に行きたい 伊勢路が見たい せめて一生に 一度でも

伊勢の旅路 欲しいものは 道の眺めと 伊勢音頭

伊勢はな津で持つ 津は伊勢で持つよな 尾張な名古屋は城で持つ

伊予の西条は 紀州の別れ 三つ葉葵の 紋所

一丈ナ 五尺の 櫓はしわらねどもヨ 男ナ 五尺の 腕しわる

一人米つく あの水車 誰を待つやら くるくると

稲は稔った みかんも柿もよ うれてわきたつ 秋祭り

雨は降る降る 人馬は濡れる 越すに越されぬ 田原坂

沖のナ カモメに 汐時 聞けばヨ 私しやナ たつ鳥 波に聞け

沖のなあ 暗いのに 白帆が見えるよ あれはなあ紀の国 蜜柑船

沖の鷗に 汐どき聞けば 私や立つ鳥 波に聞け

沖もナ 暗いのに 白帆が見えるヨ あれはナ 紀の国 みかん船

俺とお前は 卵の仲よ 俺が白身で きみを抱く

俺とナ お前とは 羽織の紐ダヨ 固くナ 結んで 胸に抱く

下の松茸 何見て伸びる 上のあけびを 見て伸びる

下津井な女郎衆が 落した、紅がよ、  
沖になあ ながれて、これさえ 權とめる、

何はなくても 出雲の土産 御覧下さい 錢太鼓

可愛ナがられて撫でさすられてヨ 見捨てナられたか 蛇の目傘

嫁になあ するなら 笠岡 娘よ  
ありや 色わなあ、黒いが、これさえ おめじょうず、

歌はなひばりか 遍路の鈴かよ かすみな たなびく 二つの上ま

花か蝶々か 蝶々か花か 来てはチラチラ 迷わせる

花はなあ 霧島 煙草は国分うよ 燃えてな あがるは 桜島

花は桜か お山は富士よ 城は尾張の 名古屋城

立てばな 芍薬座れば牡丹よ 歩くな 姿はこれさえ 百合の花

駕籠になあ 乗る人 担ぐ人よ そのまたなあ 草履を 作る人

海はなあ 大漁で 野は花盛りよ 旅のなあ 帝も 花盛り

丸いな卵も 切りよで 四角よ 物もなあ 言いよでカドがたつ

岩が屏風か 屏風が岩か 海女の口笛 東尋坊

貴方痛いは 血が出てきたよ 早く抜いてよ 薔薇の棘

菊のなあ 香りの 城山ゆけばよ 風がなあ 箏弾く 真鍋島  
泣いてくれるな 出船の時にゃ 沖で艫櫂の 手が洩る

泣いてくれるな 出船時よ 綱もいかりも 手につかぬ

泣いて別れて 松原行けば 松の露やら 涙やら

泣くな鶏 まだ夜は明けぬよ 明けりやお寺の 鐘が鳴る

居よい住みよい 噂の佐渡へよ 連れて行く気は ないものか

月に焦がれる すすきの花は 枯れてしおれて また招く

月のナ 祭りは 大仙祭りよ 一年ナ 一度は 秋祭り

嫌ななあ 男の 親切よりもよ 好いたなあ 男の 無理がよい

見えた見えたよ 松原越しに 丸に十の字の 帆が見えた  
見たかナ 聞いたか 吉津のどんと八 上はナ 鶴亀 五葉の松

見たかな 聞いたか 名古屋の城は八ヨ 金のナ 鯨 雨ざらし

見たかなあ 聞いたか 笠岡御輿はよ 中はなあ檜で 外は麻

見たかなあ 聞いたか 吉津のどんどは 上はなあ鶴亀 五葉の松

見たか聞いたか 笠岡神輿 内が檜で 外は麻

見たか聞いたか 墨田の花火 川の面に 菊の花

見たさ逢いたさ 思いが募る 恋の八尾は 雪の中

見ても見事な 屋島の山よ 根から生えたか 浮島か

古城のナ 山から 町の灯 見ればヨ 祭りナ祭りで 夜が更ける

虎はなあ 死んでも 皮を 残すが 人はなあ 死んで 名を残す

五万なあ 石でも 岡崎様はよ 城のなあ下まで 船が着く

御輿なあ 見るなら 笠岡おいで これがなあおいらの 御輿唄

鯉のナ滝昇り どなしゆて昇るヨ  
水にナさかろうて ばしやばしやと

高いナ 山から 谷底見れば 瓜やナ 茄子の 花盛り

高い山には 霞がかかるよ わたしや貴方に 気がかかる

惚れたな欲目にあ あばたも笑窪よ 惚れてな通えば 千里も一里

惚れちや ならない 他国の人にやよ 末はなあ 烏の泣き別れ

今日はかわいや わが子の門出 酒を注ぐ手も 震えがち

今日は帰ろうと 橋立見れば 泊まれ泊まれと 鳴く鷗

今年な 豊年 穂に穂が咲いてよ 道のなあ 草木も 芽が生える

今年や詣ろよ お伊勢の宮へ 花の三月 半ばごろ

今年や豊年 しこたま取れて 升はいらない 箕で計る

今夜一夜は お泊まりなさい 西の黒雲 雨となる

今夜一夜は 浦島太郎 開けて悔しや 玉手箱

佐渡が島にも 吉原ござるよ 輪島お客が 籠で来る

佐渡の土産は 数々あれど おけさばかりは 荷にならぬ

佐渡へ佐渡へと 草木もなびく 佐渡は居よいか 住みよいか

祭りなあ 見るなら 笠岡祭よ 男なあ若衆の 血が躍る

祭り見るなら 笠岡祭り 男若衆の 血が騒ぐ

坂はなあ 照る照る 鈴鹿は曇るよ 曇るなあ筈だよ 雨が降る

坂は照る照る 鈴鹿は曇る あいの土山 雨が降る

咲いたナ 桜に なぜ駒繋ぐヨ 駒がナ 勇めば 花が散る

昨日して寝た 今朝まだ痛い 二度とするまい 箱枕

三十路女と お寺の鐘は 突けば突くほど 味が出る

三島女郎衆は お化粧が長い お化粧長けりゃ 客困る

傘のナ 骨ほど 数ある中で お前ナ 一人が 俺の妻よ

傘もナ小粋な大島おどりよ 雨がなあかかれば これさえ虹となる

山で床とりや 木の根が枕 落ちる木の葉が 夜具となる

山のナ 明かりに 心が燃えるよ 見たかひったか 火の宴

山のなあ アケビは 何見て開くよ 下のなあ 松茸 見て開く

山のなあ 明かりに 心が燃えるよ  
見たかなあ ひったか ひのうたげ

始めナ ちよろちよろ 中ぱっぱよ 赤子ナ 泣くとも 蓋とるな

私しやなあ 備前の 岡山育ちよ 米のなあ 生木を こりや未だ  
知らぬ

私ナ 広げて あなたが差してヨ 差してナ 差される 蛇の目傘

私ナ探した 小さな土手をヨ あなたがナ 立てた 大きなテント

私やなあ 寝ずとも 意図や しないが 私やなあ 港の 繋ぎ船

私や広げて 貴方が差して 差して差される 蛇の目傘

私や出雲の 安来の生まれ 子守唄から 安木節

私や丹波の 勝ち栗育ち 中に甘みも 渋もある

私や備前の 笠岡生まれ 色は黒いが 気立てよし

私や野に咲く 一重の桜 八重に咲く気は 更らない

寺のナ 笠岡 鐘から明けるヨ 町のナ 栄を 招く鐘

酒はナ 飲め飲め 茶釜で湧かせ お神酒ナ 上がらぬ 神は無し

十でナ 神童 十五で天才 二十ナ 過ぎれば ただの人

出雲大社で 結んだ帯を 心安来の 夜に解く

出船入船 数ある中に 私待つ船 ただ一つ

小諸出て見りや 浅間の山に 今朝も三筋の 煙立つ

上のあけび 何見て開く 下の松茸 見て開く

上のナ ザクロは 何見て割れるヨ 下のナ 松茸 見て割れる

城の山から 町の灯見れば 祭り祭りで 夜がふける

色が黒いとて 惚れてがなけりや 山のカラスは 後家ばかり

色気ナづいたかうどん屋の娘ハヨ 入れてナ 温めて 汁を出す

色気付いたか 八月蝉よ 小松抱えて 腰使う

信州なあ 信濃の 新ソバよりもよ 私なああなたの 側が良い

心にナ 細いよ 木曾路の旅はヨ 傘にナ 松葉が 降りかかる

心細いよ 白川街道 川の鳴る瀬に 鹿の声

心細いよ 木曾路の旅は 笠に木の葉が 舞かかる

水戸で名所は 偕楽園よ 梅とつつじと 萩の花

水戸を離れて 東へ三里 波の花散る 大洗

瀬戸のなあ 内海 さーざ波添えて 踊りの名所は 白石島

成りたナ成りたや 風呂屋の椅子にヨ おそそナ舐めたり眺めたり

成りたナ 成りたや 娘の下駄のヨ おそそナ 眺めて 散歩する

声はすれども 姿は見えぬ 貴方草葉の キリギリス

西のなあ 浜から 本町抜けてよ 今日のはなあ若衆の 御輿唄

昔恋しい 鈴鹿を越えりや 関の小万の 声がする

積もる思いと 草津の雪は とける後から 花が咲く

雪の降る夜は 来ないでくれ かくし切れない 下駄の跡

雪はさらさら 松前船を 泣いて送るか 浜千鳥

雪はナ ちらちら 丹波の宿に 猪がナ 飛び込む 牡丹鍋

千曲川さえ 竿さしや届く なぜに届かぬ 我が思い

浅い川なら 膝までまくる 深くなるほど 帯を解く

船頭かわいと 沖行く船に 瀬戸の女郎衆が 袖濡らす

船頭かわいや 音頭の瀬戸で 一丈五尺の 艀がしわる

船頭ナ 可愛や 音戸の瀬戸デヨ 一丈ナ 五尺の 腕しわる

船頭なあ 可愛いや 音頭の瀬戸でよ 一丈な五尺の 櫓がしなう

草津よいとこ 一度はおいで お湯の中にも 花が咲く

息子どこ行く 青筋たてて 生まれ故郷に 種まきに

揃うたな 揃うたな 御輿が揃うたよ 捻りな 鉢巻き 晴れ姿

帯に短し 襷に長し お伊勢詣りの 笠の紐

帯は筑前 博多に限る 色は年増に とどめさす

谷の鶯 気ままに鳴いて 男心を 惑わせる

誰に買われて いくとも知れず 博多人形の 片えくぼ

丹波ナ 笹山 山賀の猿がヨ 花のナ お江戸で 芝居する

丹波篠山 その山奥で 一人米つく 水車

男ナ 心と 秋の空ハヨ 女ナ 心は 茄子の眼

竹にすずめは 品よく止まる 止めて止まらぬ 色の道

鶴が御門に 巢をかけますりや 亀がお庭で 舞を舞う

奈良のナ 大仏 羽織を着せてヨ 会津ナ 磐梯山を 嫁にとる

灘のお酒は どなたが造る おらが自慢の 人造る

二つナ 三つで イロ八をおぼえテ ハの字ナ 忘れて 色ばかり

二階ナ貸します お望みならば 下もナ 貸します 後家じゃもの

入れておくれよ 痒くてならぬ 私一人が 蚊帳の外

入れてナ おくれよ 痒くてならぬヨ 私ナ 一人が 蚊帳の外

播州なあ ちよと出や 舞子ヶ浜よな 沖になあ見ゆるは 淡路島

播州出て見りや 舞子が浜よ 沖に浮かぶは 淡路島

波がなあ音頭とある 白石踊りよ 松のなあ 傘きいて 月も出る

波の上飛ぶ 鷗を眺めて 目にはおもわず ひとしづく

馬はなあ 越前 牛は但馬よ 瀬戸のなあ魚は 日本一

梅と桜を 両手に持って どちら梅やら 桜やら

梅はナ 食うとも 竿食うなカレヨ 中にはナ 天神 寝てござる

梅はなあ食うとも 核食う無かれよ 中になあ天神 寝てござる

博多人形に 思いを秘めて 贈る私の 胸の内

博多帯締め 筑前緋 歩く姿が 柳腰

白だなあ黒だと 喧嘩はよしな 白となあ 言う字は 墨で 書く

箱根八里は 馬でも越すが 越すに越されぬ 大井川

飛んで行きたや あの山中に 思い賭たる ほととぎす

備前岡山 住みよい処 白いおままに 鯛添えて

尾張名古屋は お城で持つが 伊予の西条は 水で持つ

富士の白雪 朝日でとける 娘島田は 寝てとける

浮世ナ離れた 坊さんさえもヨ 木魚のナ 割れ目が 気にかかる

父ちゃんのナ 頭に 沢庵乗せて これがナ 本当の 親孝行

風が邪魔して つがいの蝶も しばし菜の花 裏に住む

閉めてナ おくれよ また行きそうヨ 猫がナ 戸棚の 魚取りに

北木い島から 生まれる石はよ 國を支える タカラ石

万里のナ 長城から小便すればヨ ゴビのナー 砂漠に 虹が出る

娘ナ 十七八 したがる頃ヨ 親もナ させたがる 針仕事

娘ナ 十七八 質屋の暖簾ヨ 入れたりナ 出したり 流したり

娘ナ 十七八 停車場の汽車ヨ 早くナ 乗らなきや 人が乗る

娘ナ 十七八 白地の浴衣ヨ ちよいとナ した間に 色がつく

娘ナ 島田に 蝶々が留まるヨ 留まるナ 箒だよ 花じゃもの

娘島田は 情けにとける とけて流れて 三島にと

目出度ナ目出度が 三つ重なればヨ 鶴がナ 御門に 巢をかける

目出度なあ 目出の 若松様よ 枝もなあ栄えりや 葉も繁る

夜のなあ 横島 二人でおいでよ 夫婦(みょうと)なあ 鑑(か

がみ)の これさえかぶとがに

夕べ習ろうた 山中節も 今朝は別れの 唄となる

浴衣肩にかけ 戸板にもたれて 足でほの字を 書くわいや

淀のナ 川瀬の あの水車ヨ 誰をナ 待つやら くるくると

来いとなあ 言たとて 行かりよか佐渡へよ

佐渡はなあ 四十九里 波の上

立てばなああ 芍薬 座あれば 牡丹よ

歩くなあ 姿あは これさえ 百合の花

緑なあ 常磐の 古城山松のよ 中になあ 浮かぶは 衣笠山

恋の病も なおしてくれろ 粹な富山の 薬売り

連れて行くなら 今宵のうちに 心変わりの せぬうちに

浪がナ 音頭とる 白石踊り 松のナ笠きて 月も出る

右手に血刀 左手に手綱ヨ 馬上ナ 豊かな美少年

## 付録 伊勢音頭

一 沖も暗いのに 白帆が見える あれはなす紀伊の国 みかん舟  
二 めでためたの 若松様よ 枝もなす栄えて 葉も茂る  
三 酒は飲め飲め 茶釜で沸かせ お神酒なす上がらぬ 神は無し  
四 ボボシヨボシヨと 鳴く山鳥は 鳥のなす中でも スケべく鳥  
五 奈良の大仏 羽織を着せて 会津なす磐梯山を 嫁にとる  
六 この座敷は 目出度の座敷 鶴となす亀とが 舞を舞う  
七 丹波笹山 山賀の猿が 花のなすお江戸で 芝居する  
八 お前百まで わしや九十九まで 共になす白髪 生えるまで  
九 俺とお前とは 卵の仲よ 俺がなす白身で きみを抱く  
一〇 息子どこ行く 青筋立てて 生まれなす故郷に 種まきに  
一一 万里の長城から 小便すれば ゴビのなす砂漠に 虹が立つ  
一二 入れておくれよ 痒くてならぬ 私なす一人が 蚊帳の外  
一三 昨日して寝た 朝まだ痛い 二度となすするまい 箱枕



55 紅い灯のつきたい新古市で心な惹かれた伊勢音頭  
 54 伊勢の行きたい伊勢路が見たいせめてな一生に一度でも  
 53 お伊勢の豊久野(とよの)錢懸け松は今はな枯れても名は残る  
 52 伊勢の豆好き馬子酒が好き乗せたなお客は唄が好き  
 51 馬は短しいとこ菜の花続き唄もな懐かし伊勢音頭  
 50 帯に伊勢よと伊勢が遠いお伊勢な恋しや参りたや  
 49 お伊勢の国さはお伊勢の穂もなびく伊勢はな茅葺き柿葺き  
 48 わしが伊勢へと萱の穂もなびく伊勢はな茅葺き柿葺き  
 47 伊勢へ伊勢へと熊野へ三度愛宕な様へは月参り  
 46 伊勢へ七度熊野へ三度愛宕な様へは月参り  
 45 お伊勢参りに扇を拾うた扇な目出度や末繁昌(すはなやう)  
 44 お伊勢音頭に心も浮いたわしもな踊るか輪の中で  
 43 伊勢の旅路にうれしいものは道な眺めと伊勢音頭  
 42 伊勢参りに朝熊(あさま)をかけよ呼んでなけるよな春の風  
 41 伊勢路につかお伊勢へ参り読んでな拝んですすり泣き  
 40 西行法師はたやお伊勢の参り読んでな拝んですすり泣き  
 39 成りた成りたりや風呂屋の椅子におそそな眺めて散歩する  
 38 成りた成りたりや風呂屋の椅子におそそな眺めて散歩する  
 37 茶碗どんぶり鉢落とせば割れるおそそな舐めたり眺めたり  
 36 吉田の破れ傘二階から招くせぬ妹にな鹿の子の振袖で  
 35 姉の破れ傘させそうでさせぬ妹にな鹿の子の振袖で

架けた女ケーブルで焼きた朝熊の山へ通うな心は奥の院  
 二八乙盃の中見て飲まれ中にな鶴亀五葉の松壺さざえ  
 さが来たなら小春さん屋を連れて御伊勢街道ははるばると  
 春が来たなら小春さん屋を連れて御伊勢街道ははるばると  
 いざりかつごうかかこの中で越すにな越されぬ箱根山  
 ここの裏には名何ふきはえてみまなぬたい未藪(すずはんじょう)  
 傘の骨ほど数ある中でお前なひとり止めてな止まらぬ色の道よ  
 竹にすめがしなよくとまる帆にはな古屋の城の紋よ  
 伊勢へ伊勢へ山は富士の船がな尾張の名古屋の城の紋よ  
 花は桜か山は富士の船がな尾張の名古屋の城の紋よ  
 御伊勢参りで扇ひろげな何とない末ひろがり  
 伊勢の道でこの子ができて何とないつけます伊勢松と  
 今年世が良いでこの子ができて何とないつけます伊勢松と  
 めたためたの踊り三つ重なば庭にな鶴亀五葉の松よく揃った  
 揃ったの丹波の子が揃ったば庭にな鶴亀五葉の松よく揃った  
 霧の海からど波の富士が揃ったば庭にな鶴亀五葉の松よく揃った  
 灘のお酒はらど波の富士が揃ったば庭にな鶴亀五葉の松よく揃った  
 雪はちちら丹波の宿に猪がなとびこむ牡丹鍋  
 デカンシヨデカンシヨ鳳鳴の塾で文武なきたえし美少年ねて暮らす  
 丹波篠山 鳳鳴の塾で文武なきたえし美少年ねて暮らす



